

ひげとほーき

いらぬからかへす」といひました

あるひくらまのやまからきよーと

ぢーさんしかたがないから「そんならそ

のまらへほーきをうりにでてきた

りちんはいくらだ」ときよますと「ぢっせ

おぢーさんがありました。

んだ」といふから「それは

ひげをそろーとおもって

たかいごせんにまけるそ

あるところやへはいりました。

れでなければもとのとー

た。

りにひげをはやしてお

ところのていし。もさ

け」といひました。

ぼんかいました。そこで、ひ

げをそってしまつてから

「ほーきはいくらだ」と

いひますからくらまのぢ

ーさんは「にぢつせんだ」といひました。す

るとところのていし。は「すこしたかい

からぢっせんにまけるそれではなれば



鴨をとる法

長野 飯島八千溪

やまとの翁と云ふお方から、鳥をとる法を教へて  
頂いて、大層面白うりました。

私も小さい時に、おぢいさんから鴨をとる法を聞いて置きましたから、皆さんに、お話して見ませうか。併し私も聞いて置いた計りで、未だ一度も試験した事がないから、矢張慥にとれると、お引受はできませんから、どーか其お積りで。

其法は、尻系の細い強いのを、二三丈計り用意して、其片端へ、錫を割いて、しつかり付け、夫れを、鴨の澤山下りて居る池へ持つて行て、鴨に見付けられぬ様に、靜に、錫を池の中へ浮べ、他の片端を手に巻き付て、とられぬ様に持つて居るのです。其中に鴨が見付けて、之れは、旨い香のする餌が有つたと思つて、一口に、ぐつと呑んでしまふ、處か錫は強いもの故、お腹の中でつツぱつて、心持がわるいから、直に、糞にひつてしまふ。そうすると、その次のが、そんな事とも知ら

ず又呑む、矢張具合がわるいから、之れも亦ひる其次のも又其次のも同じ様にして、池中の鴨が、皆一筋の尻系に、珠數繋に繋がれて、丁度、皆さんが、なんさん玉を糸に通した様になる。

そこで、棒の尖で、錫の付いて居る端を搔き寄せ、兩端をしつかり持つて、放さぬ様に注意し、片端から手繰つて、一羽づつとつて行



くと、しまいには池中の鴨を、一羽も残さず皆生捕る事ができませう。何と旨い法では有りませぬか。

お月さまと星め

やまとの翁

ある月の十五日の火どもし頃一人のお大名がお氣に入りの三太夫をお座近く召されて、「コリヤ〜、三太夫、もーお月さまが出たか」と尋ねられた。すると、三太夫、「ハッ」と平伏し。

「これは殿さまの仰せども思はれませぬ。殿さまが他々のものにお對ひ遊ばされては、お座附はご無用かと存じます。殿さまからお座附に遊ばされる様では私ども始め下々

の者どもは如何様に申して宜しいやら頓と困りますので、どーか其邊の御賢慮を願はしうござりまする」

お大名なるほど、御感の體で、

「フーンソーか」

どの一言。やがて暫たちますと、

「こりや〜三太夫」

「ハッ」

「エーッソ〜その〜あの星奴らはもー出よつたかな」

節儉家の集會

だん〜と世の中が進んで物入がかさんで暮し向きが難儀になると云ふ所から勤儉